シネマ女性学

自閉症児とおばあちゃん

松本 侑壬子・ジャーナリスト

本作の槇坪監督は今では車椅子の監督で知られる。その車椅子は、先年亡くなるまでは認知症の実母に押してもらっていた。デビュー作『子どもたちへ』（1986年）は、性教育がテーマであった。当時思春期にあった一人息子龍太郎君の保護者として、正しい性知識が一番必要な時期にいい映像教材が乏しいことを痛感し、ぜひ学校などで見てほしいとの思いからであったと言う。2000年からは『老親』『母のいる場所』と、介護する側とされる側からの老人問題に焦点を移した。

ふり返ると、20年を超える監督人生で撮り続けた作品のテーマは、槇坪さんの人生の歩みとともに推移している。映画を撮る際に、今の自分の気持と境遇に一番ぴったりくるテーマを選び、それだからこそ切実な思いを反映させたのである。今では成人して音楽家になった龍太郎さんが、母の作品の音楽を担当している。しかも、祖母を見送ったのと入れ違いに、母に初孫のプレゼント（?）までしてくれたのだとか。

最新作の本作は、発達障害の中の自閉症（オーティズム）をめぐる家族の物語。『老親』の原作者・門野晴子の実体験を基にした手記の映画化で、祖母のまなざしに立つ。生まれながらに障害をもつ2人の子どもを抱えてくじけそうになる親世代に対して、明るく頼もしいおばあちゃんが、孫を障害ごと受け入れ愛し、豪快に前向きに家族を引っ張っていくのである。今回も自身の実年齢に近い頼もしいヒロイン（祖母）像を共感をもって描いている。

作家の弓子（馬淵晴子）は、夫に5年前に先立たれ、今は自分一人の人生の自由を満喫していた。娘の陽子（加藤忍）は結婚して息子かおると共に夫の任地、米カリフォルニア・バークレーで暮らしていたが、ある日、夫の転勤に伴って一家で帰国した。陽子は2人目の子どもを妊娠しており、弓子の家の近くのマンションに住むことに。3歳になってもおむつが取れない、言葉が遅い、他人とコミュニケ―ションがとれないかおるを見て、弓子はひそかに自閉症ではないか、と心配する。陽子がかおるを病院に連れて行くと、はたして「自閉症」の診断が下りた。以前、町で見かけた風景 ― 奇声をあげて動き回る子どもを素早く捕まえ、世間の目を避けるようにして路地に消えて行った母親の姿が弓子の脳裏に浮かぶ。世間の目どころか、陽子の夫ですら、「しつけができていないのは母親の育児に問題があるせいだ」と妻を責め、姑も「うちの血筋にはこんな子はいない」と言う。追い討ちをかけるように、生まれた女の子にもやがてまた自閉症の診断が…。

一見普通児と見分けがつかず、ただ“へんな子”とか“わがまま”とかで切り捨てられがちな自閉症の、本人や家族の抱える困難を日常生活の中で淡々と描く。すばらしいのは60歳の“ばーば”弓子の発想の転換だ。「この子は地球上の常識の中に閉じこもっていない。星の国から来た子なんだ」と、孫たちの行動を個性として受けとめ、周りにも理解を求めて働きかける。気持に余裕のない親に代わって経験と知恵を生かした“祖母力”の見せどころ。孫をもった槇坪監督の新境地か。地味だが着実、重要なメッセージに富む良心作である。

『星の国から孫ふたり』

日本映画（95分）／槇坪夛鶴子監督

上映スケジュールは企画制作パオ（有）HPで案内
http://www.pao-jp.com/index.html